

アイヌと大モンゴルの戦い

旭川市博物館

10世紀以降、北海道のアイヌの人びとは、サハリンから南下して北海道の北半分を占めていたオホーツク文化人を排除・同化しながら全道に進出します。さらに11世紀前半にはサハリン南部、13世紀以降は千島へも進出し、15世紀にはカムチャツカ半島まで活動圏を拡大していました(下図)。

古代から中世のアイヌについて記した日本側の史料はほとんどありませんが、中国側の史料である『元史』などには、次々と活動圏を拡大してゆく13世紀から14世紀当時のアイヌの生々しい姿が記録されています。以下にそのあらましをご紹介します。

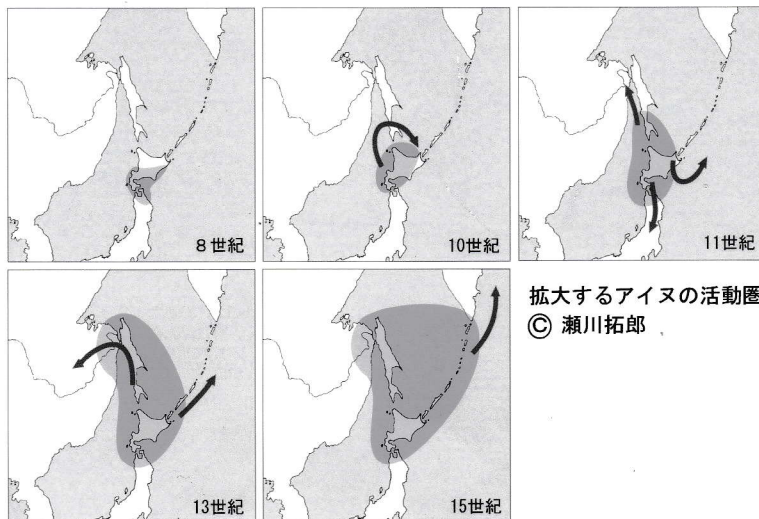
モンゴル帝国(元)は、13世紀の半ばころまでには、その勢力をアムール川(黒竜江)下流域まで伸ばし、河口部近くに東征元帥府を設置していました。さらにその政治的影響は、サハリンにまで及んでいました。

そのようななか1264年、元に服属していたサハリン先住民のギレミ(ニブフ)から、クイ(アイヌ)が毎年宗谷海峡を渡って自分たちの領域を侵すとの訴えがおこります。そこで元はときに兵1万人・船1千艘を派遣してアイヌを攻撃し、かれらの侵入を排除していました。一般に兵1万人は記録上のことだけで、実際には数千人規模のことも多かったようですが、それでもこの地域においては大軍※であったといえます。

※ちなみに「元寇」といわれる文永の役に動員された元軍は兵3万人余と船900隻、弘安の役では兵約14万人と船4千隻余。

アイヌはサハリンに侵入するだけでなく、大陸に渡って村々を襲い、略奪をおこなって元軍の手を焼かせていましたが、1308年には毎年毛皮を貢納することを約束し、元に降伏しました。

文献
中村和之1999「北の『倭寇的』状況とその拡大」『北の内海世界』山川出版社



永寧寺碑文とアイヌ

明の王朝は、元が東征元帥府を置いたアムール川河口のティルに奴児干都司(ヌルガンとし)という役所を設置し、引き続きこの地域を支配しました。この奴児干都司設置の経緯を記してティルに建立された「勅修奴児干永寧寺記」(1413年)にはサハリンのアイヌなどの先住民が貢ぎ物として特産物を携え、この地にやってきていたことが記されています。

菊池俊彦・中村和之編2008『中世の北東アジアとアイヌ』高志書院